

菅沼正子

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (10)

～デボラ・カー～

エレガンスと清潔な気品

ジェームズ・ジョーンズのベストセラー小説の映画化「地上より永遠に」(1953年)を見たとき、演技派ばかりを揃えた出演スターの中での、私の1番の驚きはデボラ・カーであった。この作品は1953年のアカデミー賞作品賞、監督賞(フレッド・ジンネマン)、助演男優賞(フランク・シナトラ)助演女優賞(ドナ・リード)が受賞している。ノミネートだけで終わったのがデボラ・カー、バート・ランカスターであった。

舞台は、太平洋戦争の発端となった日本軍による真珠湾攻撃前夜のハワイ島。描かれているのはこの島にあるアメリカ海軍基地の軍隊内部の腐敗。主役はモンゴメリー・クリフト演じる若いラッパ手で、その中隊長夫人役がデボラ・カー。映画史を語るには絶対欠かせない作品の中で、デボラ・カーの印象が私には強烈だった。彼女は上官役のバート・ランカスターと不倫の恋に落ちる気位の高い女性で、今までのデボラ・カーにはない、生々しい女の側面を見せていたからだ。それまでに私が知っていたデボラ・カーの印象は、イギリス女性ならではのエレガンスと清潔な気品。その代表的な作品が、まだイギリス女優だった頃に主演した「黒水仙」(1947年)。彼女はヒマラヤの山麓にある修道院にキリスト教の布教に赴く尼

僧の役。結局は布教に失敗して下山するのだが、この失敗によってさらに信仰心を深くするという、あくまでも純潔と強い意志の女性像。彼女によく似合っていた。

この「黒水仙」での魅力を買われてハリウッドに引き抜かれ、「クォ・バディス」(1951)「ゼンダ城の虜」(1952)「悲恋の王女エリザベス」(1952)といった史劇大作のたぐいに数多く出演していたが、決して派手に目立つほどの存在感を発揮していたわけではない。「地上より永遠に」で彼女が見せたのは、気位の高さやクールなエレガンスで表面を飾っていながら、実はその内面に単調な基地生活への倦怠と性への渇きを充満させている女。そのアンバランスの危険な美しさが、私には思いがけない衝撃だったのである。

### シスターボーイという言葉の流行

ブロードウェイで自分が演じた「お茶と同情」(1956)の主演・映画化のオファーがあったときには当然ながら大喜び。

舞台はアメリカ、ニューイングランドにある全寮制大学の寮。デボラ・カーが演じるのは舎監の妻ローラ。夫から「学生たちの私生活には深く立ち入るな、お茶を出すことと、いくらかの同情を与えていればいい」と言われている。ところが学生の1人で母親がいないトムというデリケートな学生と知り合ったことから、心が迷い始める。トムは感性がデリケートすぎて、どこか女々しく、学友からシスターボーイとあざ笑われている。それが悔しくて、自分が男であることの証を立てるため町の女給と関係を持つようとするが、彼の場合、愛のないところにセックスは成り立たず、絶望のあまり森の中に姿を隠してしまう。そのトムをやっとの思

いで探し出したローラは、思わず彼を、舎監夫人の立場を超えて強く抱きしめてしまうのだ。

その頃のアメリカ映画は、性描写に関する管理規定が厳しかった。でもローラがトムと体で結ばれたらうことは想像ができる。しかしこの映画の監督ヴィンセント・ミネリがあまりに常識派すぎたせい、禁断の一線をあえて飛び越えていく中年女性の心と体の内面を、画面からうかがい知ることは、ほとんどできなかった。

もしも監督が当時先鋭派で知られた「地上より永遠に」のフレッド・ジンネマンだったら、デボラ・カーは演技派としての声価をさらに高めただろう、と思うと返す返すも残念。

この「地上より永遠に」のほか「王様と私」(1956)「白い砂」(1958)「旅路」「サンダウナーズ」(1960)などで6回もノミネートされていながら、1度も受賞していないのは、演じる女性像の造形にいまひとつ強烈な個性の裏打ちが欠けていたからではないだろうか。デボラ・カーと言えば、今でも私の脳裏にまず「地上より永遠に」の中隊長夫人が思い浮かぶのは、たぶん、そのせいなのである。

そのほかミュージカル「王様と私」(1956)も当たり役にした。シャム王一族の子供らの家庭教師として、イギリスからやって来た、気は強いけれど心は優しいエレガントなヒロイン路線を推し進めていく。メロドラマとしては第一級の「めぐり逢い」(1957)で大いに気を吐いたものの、その後、出演作を重ねるごとに、いつしか主演の座から遠ざかっていった。

60年代末あたりから、アメリカ映画にセックス描写解禁の風潮が高まり、デボラ・カーも「さすらいの大空」(1969)で初めて全裸のベッドシーンに挑戦、大きな話題にはなったが、

あのときすでに48歳。なんで今さら？という思いを押さえきれなかったのは、私だけではないでしょう。

### 「英国の薔薇」と親しまれた

1921年9月31日、スコットランドのヘレンズバーグ生まれ。演技の勉強はイングランドの演劇バレエ学校で重ね、映画界に引き抜かれてデビューそうそうに準主役をもらう。この順調なキャリアは、1947年にアメリカ映画に招かれてのちも続いた。しかし「地上より永遠に」のほか「王様と私」「白い砂」(1957)「旅路」(1958)「サンダウナーズ」(1960)などでアカデミー賞に6回もノミネートされているながら1度も受賞ならず、とはなぜ？私が分析するには、演じる女性像の造形に、いまひとつ強烈な個性の裏打ちが欠けている、と言いたい。デボラ・カーと言えば、今でも私の脳裏にまず「地上より永遠に」の中隊長夫人が思い浮かぶのは、たぶんそのせいなのである。

結婚は2回。24歳の時に空軍少佐と結婚、2児をもうけたが59年に離婚。60年、脚本家と結婚。2007年10月16日死亡。